

お金や証券の受け渡しを、安全かつ効率的に行うには？



麗澤大学 経済学部 経済学科 教授

中島 真志 先生



金融システム # 決済システム # 仮想通貨 # ブロックチェーン # デジタル通貨

サクッと解説！

この記事のサマリー

✓ 研究テーマについて

ブロックチェーン*や仮想通貨*2などが登場し、金融のキャッシュレス化やボーダレス化が進む中で、社会インフラとしての新しい決済システムのあり方や可能性を研究。 *ブロックチェーン：ネットワーク上の端末間で暗号技術（データを解読できないように変換する技術）を用いて取引の記録を分散的に処理・記録する技術。 *2仮想通貨：ブロックチェーンを利用して中央銀行などの中間機関を介さずに取引されるデジタル通貨。代表的なものにビットコインやイーサリアムなど。

✓ 先生の研究の源泉について

日本銀行の在職中に決済システムと出会い、時間をかけて新しいしくみを構想・構築することに意義を感じた。当時の日本で研究者がいないニッチな分野であったことも魅力。

✓ 先生が大切にしている探究のアプローチ

銀行での実務経験をもとに、学術の専門家と実務家の橋渡しの的なポジションにあることを強く意識して研究を進めている。俯瞰的な視点をもちつつ、現場の肌感を忘れずにいたい。

Research Theme

研究テーマ について

—先生の研究テーマについて教えてください

変革期にある社会インフラの1つである「決済システム」を研究

お金や証券の受け渡しを行う「決済システム」について研究しています。決済は、商品やサービスの購入だけでなく、資金移動や証券・外為*などさまざまな場面に必要であり、高い信頼性と効率性が求められます。セキュリティや法令などさまざまな領域にかかわるので、研究では幅広い視野をもつことが大切です。近年は、電子決済や仮想通貨など新しい技術や手法が登場する変革期にあり、実社会への提言やアドバイスも研究者として重要な役割ととらえています。

*外為：外国為替の略称で、異なる通貨間の取り引きのこと。



「研究者と実務者の橋渡し役になりたい」と語る中島先生。

—どんな方法を用いて研究しているのですか？

世界的トレンドをとらえつつ、日本の決済システムへの実装を構想

デジタル通貨やフィンテック*、ブロックチェーンなど、トレンドや技術に関する論文から情報を得ることが研究のベースです。さらに世界中の金融機関やシステム関係者が一堂に会する国際会議への出席や、官公庁や銀行などのキーパーソンとの意見交換など、活きた情報に触れることも大事にしています。そのうえで、日本における決済システムの課題や施策、将来の可能性や影響などを考察し、論文にまとめるなどして発表しています。

*フィンテック：「金融：Finance」と「技術：Technology」を組み合わせた造語で、金融サービスを技術で革新すること、またはその技術。



SWIFT（国際銀行間通信協会）が開催する「Sibos（サイボス）」という国際会議には毎年参加。金融にかかわるさまざまな議題について話し合う。

—現在最も力を入れている研究テーマについてお聞かせください

デジタル化で活性化する電子決済に関するさまざまなテーマへ展開

電子決済が一般化する中で、ビットコインやステーブルコインなどの仮想通貨や非代替性トークン（NFT）*、中央銀行が発行するデジタル通貨「CBDC」、国際金融機関間の送金や決済を可能にするネットワークシステム「Swift（スイフト）」などに研究領域を広げています。金融の変革期にあたり、日本が国際社会と足並みをそろえつつ、未来に向けて安全で効率

的な決済システムを作れるよう、講演や寄稿、政策提言なども積極的に行っています。

* 非代替性トークン（NFT：Non-Fungible Token）：ブロックチェーン技術で作成された唯一無二のデジタルデータ。偽造が困難な鑑定書や所有証明書が付与され、アートや音楽、ゲームなどをデジタル資産として売買できる。



2024年11月には「SWIFT」に関する書籍を出版した。

—研究のおもしろさや魅力はどういった点にありますか？

「抽象的な理論」と「現実への展開」の双方にアプローチできる

今後、決済システムのデジタル化がさらに進むのは間違いありませんが、例えば電子マネーが登場した時、それが浸透するか未知数だったように、変化を社会が受け入れられるか、誰でも利用できるかなどの課題があります。私自身は銀行の実務経験があり、理論だけでなく現実を意識しながら双方向への橋渡しが行えることに、意義やおもしろさを感じています。学生にも机上だけでなく、金融のリアルを感じながら学んでほしいので、日銀や東京証券取引所への見学やビジネスコンテストへの参加など、さまざまなフィールドワークを取り入れています。



日銀グランプリではファンドやNFT化などの提案を行い、入賞経験もある。

History

先生の 研究の源泉について

25年間の実務の蓄積と出会いが、学術を現実に生かす研究へ導く

大学を卒業後、日本銀行で景気動向の調査に約10年間従事しました。重要な仕事ながら変化を追いかけることが虚しくなっていたころ、金融研究所に異動して担当したのが「決済システム」でした。リスク管理や効率性の向上に取り組むことで、社会インフラとしての決済システムの性能を高め、人々の生活やビジネスを支える。そこにおもしろさとやりがいを感じてのめり込むようになったのです。資金決済に始まり、株式などの証券決済、外為の決済と対象を広げ、スイスのバーゼルにある国際機関「国際決済銀行（BIS）」で世界の標準づくりに携わる機会も得ました。当時は日銀でも新しい分野だったため、組織の内外から意見を求められ、数少ない専門家と認識されるようになりました。はじめから純粋な学者になろうとしたのではなく、今でも目指しているのは実務家と学術研究者との間。約25年間の実務経験があるからこそ、学術研究を現実のシステムに生かす橋渡し役ができると考えています。



高校時代の親友と卒業式で（向かって左が中島先生）。将来のことは漫然としか考えていなかった。

先生の年表

● 高校1年生

歴史が好きで文系を選択した、というのは表向き。理系科目を得意とする友人が多く、自分が理解できない問題をすらすらと解く姿に圧倒されたのが本当の理由。

高校3年生

やりたいことが決まっておらず、「つぶしがきくのは法学部」というアドバイスを受けて一橋大学法学部に進学。「あわよくば司法試験に受かって弁護士に」と考えていた。

大学3年生

概念的なテーマよりも、無銭飲食などリアルな犯罪事例の研究が面白いと感じて刑法のゼミに所属。金融の世界を幅広く見られるのではないかと思います、日本銀行に就職。

社会人1年め

金融についての知識がないまま調査統計局に配属され、景気変動調査を担当。10年めに金融研究所に異動になり、決済システムのおもしろさに開眼。以降、キャリアとして志向する。

社会人18年め

出向先の金融情報システムセンター（FISC）で書いた論文をまとめ、2000年に『決済システムのすべて』として出版。現在も決済関係者が読み続けるロングセラーに。

研究者1年め

スイスの国際機関「国際決済銀行」で国際標準化の策定にかかわるなど、25年の実務経験を積んだのち、2006年に麗澤大学の国際経済学部（当時）教授に就任。研究者としてリスタート。

先生が進路選びの時に 大切にしていた価値観

やりたいことが見つからなくても焦らない。みつけたら突き詰めて深掘りする。ニッチなテーマほど強みになる！

Point of View

先生が大切にしている 探究アプローチ

広い見地で物事をとらえながら、小さなことから実践を試みる

新しい考え方や技術についての膨大な情報に触れていると、劇的な世界の変化に目を奪われるでしょう。一方、日本の現場の実状を知るほど、変化への障壁や課題を感じて些末なことばかりにとらわれがち。得てして人はどちらかに偏る傾向がありますが、視野を広くもって大局をとらえながら、日々の実践によって小さくとも歩を進める、両方についてバランスを取りながら、粘り強く探究し続けることが大事だと考えています。

プロフィール



麗澤大学 経済学部 経済学科 教授

中島 真志 先生

1958年生まれ。1981年に一橋大学法学部卒業後、日本銀行に入行。調査統計局、金融研究所、国際局、国際決済銀行（BIS）などを経て、2006年より現職。近著に「Swift：グローバル金融ネットワークの全貌」（東洋経済新報社）。

先生のもとで学んだ先輩の研究テーマ

- ・メタバースと金融 ～金融機関のメタバース参入に向けて～
- ・デジタル地域通貨 ～地域経済の活性化に向けて～
- ・高齢化社会における家族信託の役割

この研究に関わりがある学問

経済学

経営学

商学